

静岡県日中友好協議会

# NEWS LETTER

No.135  
2024.7



## スタイリッシュな空間

### 杭州西湖湖畔に佇むブックシティ “最天使文創書城”

ここは元々南宋皇城遺址・南宋御街であり、また少し前までは杭州煙草工場の古い工場跡でしたが、今は書店をキーワードにした“ブックシティ”として蘇り、24時間営業のブッ

クカフェ、更に子供向けの創造エリア、友人同士のコミュニケーションエリア、カフェ・ティバー、美術・工芸作品展示エリア、地域企業インキュベーター基地として、複合商業施設、斬新なデザイン、文学・美術による融合は若者の心を捉え、若者が集まるホットスポットになっています。



## 特集

### 2024年度定期総会を開催 鈴木県知事が新会長に就任 浙江省から総工会代表団、径山萬寿寺一行が来静

- ◎ ウオッティング 中国の今・・・中国で進化する日本で生まれた「QR コード」
- ◎ 駐在生活からみえる「今日のランチ」 静岡県上海事務所 石川祐介所長
- ◎ 中国啤酒物語 -VOL 1-
- ◎ 吳昌碩の世界 詩・書・画・篆刻の巨匠

# 2024 年度定期総会開催 鈴木県知事が新会長に就任

5月30日、ホテルアソシア静岡において、当協議会の2024年度定期総会が開催されました。冒頭、増井浩二理事長より挨拶があり、続いて来賓を代表して落合慎悟県議会議長に祝辞をいただきました。総会では、昨年度の事業報告と収支報告を承認、併せて本年度の事業計画と収支予算を決定しました。また、川勝平太県知事の辞任にともない当協議会会長退任・空席となっていましたが、県知事に鈴木康友氏が就任され、鈴木県知事の意向をふまえつつ、総会において鈴木県知事の会長就任について賛意を得られ、総会で承認され、鈴木新会長の下でスタートすることになりました。



## 祝辞要旨：落合慎悟 県議会議長

中国の伝統文化や現代文化は日本で高い関心を集めています。言語学習、留学、観光などの形で多くの日本人が中国文化に触っています。文化交流は、相互理解の促進に寄与しており、友好関係の基盤を強固にしています。昨年本県では、中国の成都市、梅州市、韓国の全州市の3都市とともに「東アジア文化都市」に選定され、日本の文化首都として、様々な文化事業を県内各地で開催しました。こうしたイベントを通じ、特に次世代を担う子どもたちが世界の文化に触れ、国際交流を深める機会を得られたことは、非常に意義深いものです。

県議会としても、様々な機会を通して、本県と浙江省、さらには我が国と中国の信頼の絆が一層堅固なものになるよう、努めてまいる所存ですので、協議会の皆様にも、今後とも両国の人々の更なる友好発展のため御尽力をいただきますようお願い申し上げます。

## 会長 鈴木康友



### [略歴]

1957年浜松市生まれ  
慶應義塾大学法学部卒業。松下政経塾に第1期生として入塾  
衆議院議員、浜松市長などを経て、2024年5月静岡県知事に就任  
座右の銘は「至誠通天」

挨拶要旨 増井浩二理事長

## —Win・Win の成果が出る交流を期待—

本協議会も今年で設立45周年を迎えました。この間、日中間でも様々な状況情勢がありましたが、静岡県及び県下全市町並びに多くの関係団体や企業等の皆様から多大なる御理解・御協力を賜り、概ね順調に発展してまいりました。

1982年に本県が浙江省と県省友好提携を締結してからは、本協議会の事業も、浙江省との交流を中心に、人事・文化・経済・教育・スポーツ・マスコミ等、幅広い分野での交流を推進し、多くの成果を収めてきました。また、新型コロナウィルス感染症の時期には、オンラインで会議やシンポジウム・セミナー等を開催し、交流を閉ざすことなく、継続して交流を促進することができました。これも、関係各位の御支援の賜と、改めて感謝申し上げます。

昨年初めより、中国からの訪日団の来日が再開し、昨年11月には、4年ぶりに、浙江省経済代表団を静岡に迎え、静岡県・浙江省経済交流促進機構全体会議を開催することができました。また、本年3月には、私も理事長就任後初めて、浙江省を訪問することができ、盧山副省長(促進機構浙江省委員会主席代表)をはじめ、新旧友人と親しく面談することができ、コロナ後の交流再開を肌で感じ取ることができました。また、5月中旬には、浙江省杭州市にある径山萬寿寺より、御住職以下21名の訪日団が静岡を訪問され、大変親しく交流いたしました。

昨年9月には、富士山静岡空港と上海浦東国際空港を結ぶ、中国東方航空による直行便が復便し、4月からは週4便が運航されています。今年3月に私が浙江省を訪問した際には、杭州蕭山国際空港を訪問し、浙江側からも、1日も早く、杭州と静岡間の直行便を復便させたいとの要望をいただきました。その後、本県側でも各関係部署で調整を図った結果、7月10日から、水曜日と土曜日に、北京首都航空によるフライトが再開されることになりました。まだ、日本人が訪中の際には、ビザ取得が必要という問題も残っていますが、これらの直行便復便により、交流の往来もより一層活発化されるものと期待しています。



近々、日中両国の首脳会談が行われますが、日中両国間を巡る情勢も変化している中にあって、本協議会は、浙江省を中心とする中国との交流を、地方レベルで、民間レベルで、本協議会の独自性と人脈を活かし、双方がWIN・WINの成果を得ることができる交流を積極的に推進していきたいと思っております。

## 浙江省総工会が来静、6年ぶり対面交流

4月14日から17日までの日程で、浙江省総工会代表団が来静し、県労働者福祉協議会・日本労働組合総連合会静岡県連合会との友好関係を深めました。

浙江省総工会は1952年設立、浙江省の労働者の権益保護や弱者支援、職業技能向上のため活動しています。静岡県労働者福祉協議会との間に1986年に友好交流に関する基本合意を結び、その後1994年には連合静岡も加わりました。今回、2018年以来、コロナ禍で中断していた訪問を再開、省総工会副主席で対外交流担当の陸英氏ほか5名が来静しました。一行は、労福協連合静岡を訪問し、静岡市内の小学校や企業、こくみん共済 coop・労働金庫等を訪問・視察しました。



## 径山萬寿寺訪日団が来静、聖一国師を巡り交流

杭州「径山萬寿寺」戒興住職一行が来静し、聖一国師顕彰会と交流しました。

径山萬寿寺の戒興住職を団長とする僧侶・居士20名が新茶の季節5月に来日し、聖一国師ゆかりの福岡・京都・静岡を巡りました。杭州市余杭区径山鎮にある禅寺「径山萬寿寺」は静岡茶の祖・聖一国師が修行したことで知られる寺院であることから、聖一国師顕彰会(会長・酒井公夫静岡商工会議所名誉会頭)が訪日団一行来静を招きました。中国の伝統的製茶技術とその関連習俗である「径山茶宴」は日本の茶道の基(いしづえ)とされ、2022年11月にはユネスコ無形文化遺産に登録されました。12日には聖一国師顕彰会は歓迎交流会を開催、径山萬寿寺の茶畠や茶宴の様子がビデオ上映され、聖一国師の軌跡を辿りました。13日には葵区栃沢にある聖一国師の生家・米沢家を訪れ、葵区日向の大川生涯学習交流館で献茶式を行い、「径山茶宴」を披露しました。



## 中国で進化する日本で生まれた「QRコード」

今や中国では無くてはならないものとなっている、一般的な決済手段として普及している「QRコード・デジタル決済」。「QRコード」は日本のデンソーが開発した技術で、1994年に発表された。バーコードの弱点を克服するために開発されたのが「QRコード」。QRコードでは、コードを2次元に処理することで、かな・漢字では約1800文字、英数字だと約4300文字、数字だけであれば約7000文字もの情報を格納できます。

### デジタル決済は「Alipay」と「WeChat Pay」が主流



こうしたQRコードの技術を利用したのが「QRコード決済」です。QRコード・デジタル決済は「スマートフォンでQRコードを読み取ったり、表示したコードを読み取らせたりして支払う」といったシンプルなもので、2011年に中国のEコマース最大手であるアリババ傘下の「Alipay(アリペイ 阿里支付)」がアリババに出店しているパートナーの実店舗で利用する支払い方法としてこの「QRコード・デジタル決済」を導入しました。2014年には、テンセント傘下の対話アプリ「WeChat(ウィーチャット 微信支付)」で決済ができる「WeChat Pay」も拡大し始めました。その後、中国におけるスマホ上のアプリのQRコード決済といえば、「Alipay」、または「WeChat Pay」であり、爆発的に普及しています。

### 貧困層まで浸透するキャッシュレス社会

コンビニやタクシーはもちろん、個人経営の飲食店や雑貨店、道端の屋台、果ては路上の物乞いまでもが、「QRコード」を使ったキャッシュレス社会を生きています。スマホなしでは生きてはいけない路上の物乞いまでQRを活用するほど、中国でキャッシュレス化が進み、社会の貧困層にまで、スマホとキャッシュレス決済、それなしでは生活が成り立たなっています。



### スマホがキャッシュレス社会の基盤

中国のネットユーザーの多くは、固定電話ではなく、いきなりスマートフォンを通じてネットにアクセスしているため、キャッシュレス決済を導入する下地が日本以上に整っていたことが証左としてあげられます。また、中国は携帯電話の基地局（携帯の電波を送受信するアンテナ）の生産でも日本をはるかに上回り、世界のトップクラスにあり、パソコンによるインターネットの普及が遅れたからこそ、全国民がどこでもスマホでネットにつながる“スマホ先進国”となり、キャッシュレス社会の基盤がつくられたといえます。



## 駐在生活から見える 「今日のランチ」

大家好！（皆様こんにちは！）、静岡県上海事務所の石川です。4回シリーズで「今日のランチ」をテーマに、駐在生活からみえる中国の今をお届けします。

早速ですが、皆さんは最近、中華料理を食べましたか？日本でも麻婆豆腐、青椒肉絲、エビチリなど美味しい中華料理が沢山ありますが、私が中国で驚いたのは、現地には、日本の何百、何千倍もの豊富なメニューがあることです。



中国に興味を持ち始めると、日本でも「中国料理」と「中華料理」を使い分けている方がいらっしゃることに気が付きます。その使い分けは所説ありますが、「中国料理=中国で食べられている料理」、「中華料理=中国料理を現地の味覚にアレンジした料理」というのが一般的でしょうか。私は中華料理の「ゴマが香るタンタン麺」も大好きですが、中国・四川省で食べる「辛さで汗が噴き出す担担麺」は本当にお勧めです！

世界三大料理（中国、フランス、トルコ）の1つである中国料理ですが、現地では「八大料理」と呼ばれる中国各地で磨き上げられた料理が確たる地位を築いています。「山椒のしびれる辛さがクセになる四川料理」、「中国一辛くて濃厚な湖南料理」、「ニンニクたっぷりの山東料理」など、中国各地への出張では、現地の味に触れるのが楽しみでもあります。

この原稿を書いている6月末、私は三島市の友好都市である「浙江省・麗水市」を訪れました。麗水市は市内の9割が山地で、豊富な水源と綺麗な空気を活かした半導体、医薬品、自動車エアコン等の製造が盛んな「環境保護と経済発展の両立を目指す地域」です。

この日の昼食は、現地の方々と麗水名物のキノコ鍋を囲みました。静岡県が友好提携を結ぶ当地の「浙江料理」も中国八大料理の1つで、「素材の味を活かしたさっぱりした味わい」で有名です。現在は中国でもコールドチェーンが発達し、上海など都市部では世界中の料理を楽しめますが、こうして地元の新鮮な食材に触れるのは、出張時の何よりの楽しみです。円卓には初対面の方もいましたが、お茶で乾杯しながら談笑し、1時間の食事であつという間に距離が深まる中国式のランチは、この国ならではの文化といえるでしょう。

皆さんは今日のお昼は何を食べますか？どうぞ楽しいランチタイムをお過ごしください！



静岡国際経済上海事務所  
石川祐介所長



# 中国啤酒物語

VOL1

古代中国に、ビールに似たアルコール飲料が存在し、それは「醴(甘酒)」と呼びました。醴(甘酒)は次第に消失し、漢代以降、穀物発酵の「酒曲」から醸造される黄酒に取って代わられました。その後、本格的なビールが現れるのは19世紀末になって中国に伝わった、外国伝来で定着した酒類です。中国では、ビールは英語の "Beer" を中国語に訳して「啤」(ビ)とし、「啤酒」(ピュー、ビール)と呼ばれるようになりました。



## 中国初のビール工場「哈爾濱ビール」

1900年には、ロシア人によって設立された哈爾濱市(現黒龍江省・省都)のウーリュフ・ブレフスキイ・ビール工場(現在の哈爾濱ビール)が中国初のビール工場となりました。その後、1903年には英独合弁のアングロ・ジャーマン・ビア・カンパニーが青島市に工場を設立し、青島ビールの前身となりました。1915年には、北京の双合盛ビール工場(現在の北京五星青島啤酒有限公司)が設立され、中国初の中国資本のビール工場としてビールを生産しました。1900年代、中国人はビールを飲むことに慣れず、「馬尿」とさえ呼ばれるほどで、当時中国のビール消費者は主に外国の役人や移民でした。

## 中国のビール業界の発展、世界一の生産量

今や中国のビールは、2023年の生産量は3,555万kℓと、中国は20年連続で世界最大のビール生産国であり、中国国内でも最も消費されるアルコール飲料に成長しています。

**(1900~1978年) 導入段階** ビール市場は外資系企業にほぼ独占され、国内ビール産業は西洋の醸造技術に依存、新中国成立(1949年)後、技術導入を通じてビール醸造技術の国産化を徐々に実現し始めました。

**(1979~1993年) 一都市・一酒造工場段階** ビール業界は急速な発展し、黄金期を迎え、地ビールブランドの台頭を促進し、「一都市に一ビール工場」の局面を形成しました。



**(1998~2013年) 勃興段階** 大手ビール企業は他の酒造工場買収により市場シェアを拡大し、民族系では「華潤」、「青島」、「燕京」など、外資系では「バドワイザー」、「カールスバーグ」などが市場寡占構造を形成しました。

**(2014~2016年) 在庫量競争段階** ビール生産量はピークに達し、市場は在庫量競争時期に入り、全体の生産量は下落し始め、業界の成長も減速し、企業は新たな成長点と競争戦略を求め始めました。

**(2017~現在) ハイエンド化段階** ビール市場は中成熟期から高成熟期市場へと転換し始め、消費者のビールに対する需要は單一同質化から多様化、個性化へと転換しています。

ご しょうせき  
**吳昌碩の世界**

詩・書・画・篆刻の巨匠

日本の文化人や芸術家との親交も深かった吳昌碩(1844-1927)は、詩・書・画・篆刻全てに秀でた才能を持つことから「四絶(四つの芸術で並外れた技量や能力を持つ)」と称賛され、中国近代で最も優れた芸術家として知られています。

吳昌碩は、浙江省考豊県鄣吳村(現湖州市安吉県)で代々郷試に合格して舉人となるエリート家系に生まれ、父親の吳辛甲は私塾教師であったことから、幼少期から父親より篆刻や古文の手ほどきを受けました。17歳の時に太平天国の乱が起き、戦火を逃れるため、湖北省や安徽省などで5年間の避難生活を送り、22歳で郷試を受け秀才の資格を得ましたが、25歳で幕客(高級官僚の私設秘書)として各地を放浪、29歳で浙江省帰安県菱湖鎮の施氏と結婚、その後も杭州や蘇州、上海などを転々としながら書や画を学びつつ、書画作品を売って生計を立てる職業書画家の先駆者でもあり、上海の富裕層が吳昌碩の文人画を好んで買うようになり、その画名が高まり、高値で取引されるようになりました。1927年、中風が悪化して84歳で病没。



### 吳昌碩の篆刻

吳昌碩の篆刻は、若い時代に学んだ浙派篆刻の影響を受けています。作品には浙派の刀法技術・字形・雰囲気などが感じられます。また、鄧石如・呉讓之・趙之謙など名家に師事した際に会得した、古代碑や磚瓦文字など、古(いにしえ)からの幅広い手法もまた吳昌碩の篆刻に強く影響を与えました。



吳昌碩は、戦国時代、秦漢時代の刻印、銘文陶文、封泥、漢晋磚瓦文字など古い資料を深く探求し、吳昌碩自身の流儀として大成させました。



更に重要な点は、吳昌碩の書法や中国画に対する緻密な探求が、吳昌碩だけでなく、後世の印章技術にまで影響を及ぼしたことです。吳昌碩は、厲良玉と趙之謙と並んで「新浙派」の三大代表人物と評され、伝統的な刀法である衝刀法・切刀法を基礎として、叩く、突く、穿つ、磨くなどの方法を用いたり、砂や石、釘などの道具を使ったりして、篆刻の表現を無限に広げ、印影美の新境地を構築しました。

発行所：静岡県日中友好協議会 発行人：増井浩二

静岡市葵区追手町 44-1(静岡県産経会館 1階) TEL:054-255-8111

※「NEWS LETTER」は、当協議会 HP (<http://www.japanchina-shizuoka.jp/>) でも閲覧できます。